

病院長挨拶～令和 7 年の年頭にあたり～



市立三次中央病院長
永澤 昌

市立三次中央病院ホームページを訪れてくださりありがとうございます。広島県北東部に位置する備北二次医療圏において、当院は地域の中核急性期病院(328床)です。令和7(2025)年の年頭にあたりご挨拶を申し上げますとともに、当院の近況およびこの十数年間の取組をまとめさせていただきます。

“協調と共有”の二本柱

平成17(2005)年8月に設立された三次市四病院連絡協議会(以下、協議会)は、令和7(2025)年で20周年を迎えます。地域医療の推進と医療資源の有機的活用を目指し、市立三次中央病院、親和会三次病院、微風会ビハーラ花の里病院、三次地区医療センターの4つの病院が協力して運営しています。日頃より“協調と共有”のできる医療連携が当たり前となっていることは、とても有意義です。急性期から慢性期、緩和ケア、地域包括ケアに至るまでの三次市における医療ニーズに即応できるだけでなく、災害時といった急場でも大きな力を発揮できるものとなっています。

備北地区全体での“協調と共有”は、平成29(2017)年4月に全国で初めて認可された地域医療連携推進法人「備北メディカルネットワーク」(以下、備北NW)が推進しています。協議会と備北NWの二本柱は、令和2(2020)年4月～令和5(2023)年4月のコロナ禍において、連携プレーの良さを存分に発揮しました。他地域にとっては模範となりました。例えば、YouTubeでの新型コロナワクチンの取扱などの情報発信は、多くの問合せや活用依頼がありました。

医療機器の導入と技術革新を継続

平成24(2012)年には、iPadによる電子カルテ閲覧システムの導入。平成26(2014)年にはPET-CTを導入など、備北圏域の中核病院としての役割を果たしてきました。さらに、令和5(2023)年12月には、電子カルテの完全クラウド化を行い、災害対応への備えを進めています。

診療体制の充実のために

平成27(2015)年に腎臓内科外来開設、平成28(2016)年に緩和ケアセンター開設、平成30(2018)年にリウマチ・膠原病科外来開設、血液内科外来開設を行いました。これらに伴い医師数は、平成6(1994)年の34名から、平成24(2012)年には60名、令和5(2023)年には86名と増加しました。

令和2(2020)年からのコロナ禍に伴う看護師不足から、1つの病棟(包括ケア病棟)を閉鎖しています。残された医療資源を有効活用するための施策として、令和6(2024)年にこの病棟へ外来化学療法センターの拡充移転を行い、さらに外来に内視鏡センターの

改修拡充を行いました。これからも、地域の声に応える形で当院の診療機能の充実を図ってきています。

今後は、看護師・薬剤師の確保対策と医療 DX の推進による効率的な医療ケアの実現に、より積極的に取り組んでいかななくてはならないと考えています。

地域医療連携のさらなる強化

備北 NW では、令和 5(2023)年より地域フォーミュラリ推進事業に取り組んでいます。県及び地区医師会のサポートもあり、迅速な事業の展開を行っていることは全国的にも注目されています。

新病院建設計画の始動

病院の老朽化・狭隘化を受け、令和 4(2022)年度から新病院の改築事業に着手しています。感染症対応、災害時対応が可能な構造建築を計画し、医療機能のさらなる充実を具現するために令和11(2029)年度内に現地開院予定です。

医療の質向上への取り組み

平成 18(2006)年より患者サービス向上委員会主導で始まった医療の総合質管理(TQM)に取り組み続け、現場スタッフによる改善活動を推進しています。具体的には、「転倒転落を減少させる取り組み」や「患者待ち時間短縮の取り組み」などを行い、医療サービスの質向上に努めています。

これらの取り組みにより、市立三次中央病院は地域医療の中核としての役割をこれからも果たし続け、医療サービスの向上と地域住民の健康維持、地域包括ケアの充実に貢献していきたいと思っております。これからも、皆さまがたのご支援をよろしくお願いいたします。

(令和 7 年 1 月 6 日 脱稿)